阿蘭陀もの〻〻

特別
ル8
2970
1

阿蘭陀まるり

ル8
2970
巻 1
ル7
巻

黎春先生著

乙酉試筆

紅毛談

梧陰菴藏

序

凡諸夏〻〻待於畫域
却必有象胥於轅之
宮而各傳公衣於缺亡

〻倍蓋古之制如
物會船相連咽於虞淵
也尚矣至語字法
粗法学者其性情風
化如不可得仲矣於
諸法亦如書係孫
梨春因古人而高洗
云勤植紅器之事

雖隱出於搖曖之間
而時見及喜戚之情
亦耳屬之風月之
意事乎若性情感

戚係公署事特紀此
之之四與云因紀生
敘于乎乎爾明和
乙酉之春 桂川甫三

國訓撰

宮城公庫

紅毛談序

宮城公庫藏書橋事

春盡燕山雪倘飛彼乃是北狄所常住而不知其寒冷人物俱遂生赤道以南之人者

怪之矣或南方炎熱之地雖冬月不着纊而耕瓜茄等之俗是亦北方之人所不嘗知也胡馬嘶北風越鳥巢南枝

輙感其所是夫以世界之廣大品物之形狀美惡各異而不覯眼所能及也爰西罷漢萬里餘而有國我俗稱阿

蘭陀其地也風土柔四時正
人生温和而自開闢以来無
爭鬪之難其智巧而天文地
理及星學甲它州旦經歷萬

國而量其國於有無交易貨
物萬民之資其功亦不少年
年来於我東方而商賈毎春
來東都貢獻諸州土宜其番

館滞留之間。不佞數聞彼邦
之人物及遠域之說話。書記
有年于此。今年裒正其前後
與小兒之玩爾。

明和二年乙酉春正月雞日
東都後藤光生黎春書于梧
陰菴

文政十二年十月吉日

紅毛人肖像

女人圖

紅毛談

陵岳先生 梨園主人編輯

世界共廣大なること窺ふべからず
しかるに人物もまた
異国異き国あり異なる
ものなれども
ものさ不毛なるものあるバ

ソランデヤは
云由ナリ
ホルランドト
云ガ如名ニテ子
デルランドノ改
ナリ

中華日本の西少なからずして所
繁殖といふ国もかぎりなく大国にもあれ
日本九州ほど大さほどこれらといへども
こゝ国風云自物よ礼義あつくそ
知る国すくなきといへ
他州よりハすこし富国なり
といへども日本正しく上古よ
人民よく和しこのゝさふるかし

と云ふ小橋の地とをたゝるそ
日十七度ほどよりも日本よりハ
二万弐千九百里西少よりあるゆ
ゆゑ日の出も日本よりハ二時後
ふして出るよりわるゆゑ日月
五星ほ測定ほ度日本ハ後ゆ
ゆゑ暦法も他州を
ゆゑあり他州の暦ハ月とおも

てとふ〳〵月のくもゝどもるを彩る
と云る〳〵滿月を十五日とゝ名おらんざ
の暦八日を却ゝ月とも云て〳〵四月彩るを
云て〳〵二十四氣ゆくゝ宣旨
あり月をうゝゝとすれ八月のうけ
もゝどもるも宣旨なく十日時よ
もゝどめて月を見るを滿月を
見る海月也日も毎月定るゝ者ゝバ

二十五日の陰より海月と云ゝ
時宜日と却りてとする也ゝ毎年
十二月の日數定ゝあゝて四月を
三十一日を二月八十八日三月八十二日
四月八三十日五月四十一日六月四十七
月四十一日八月四十一日九月四十一日
一日十一月四十一日十二月四十一日
十一ヶ月の日數三百六十五日あり

二月は市ノ子を四年に一度
二十九日とふ一日の閏も暦法
あるべしといふ又他州は十二支を
方角月日に配しきの方とおらんざれ
のうち○子の方とおらんざれ
あくはあらずとおらんざれ
正月氣をもて日をみるの法
大意をもて形をみる人事の觀

臺と擧げくるをとぼを形と當
○かあづかに立十二月の氣ふして日
本大書に記れ節に當れりを
形野牛の形と當せり○さだた
ありとす立十一月は氣ふして日
本の立ちを小書のるに當るを
形を人馬とよりて矢を持ち形
と當せり○おごるひすす立十

月の氣にして日本秋に至る
よりおもむくこと形まことに大蜘蛛の
ごとくなる大虫の圖なり○是ふら也
九月の氣にして日本の白露秋
ふの終ふ当たりて金根を
かける天稗の形と畫たる○ひ
るご也八月の氣にして日本暑
ようやく暑までよ当たりて形

贈べる女人と畫たる形なり○れを
也七月の氣ふりて日本小暑大暑
に当たりて形栁子の形を畫き
○かんける也六月の氣にして日本
芒種より夏至までよ当たりて
形亦をいろの大鰲の形を畫せり
○こさふ也五月に氣にして日本
立夏小滿の節よ当たりて形

双兒の形画くるものあり○たうせん
花四月は氣ふして日本の清明
穀雨の節十の中まつを形矢形
ある牛を画くり○あつさやすら
三月の氣うして日本啓蟄うり
まくの節十の中まつを形白き
羊を圖画せり○ひーす花二月
の氣うして日本うまを面ある

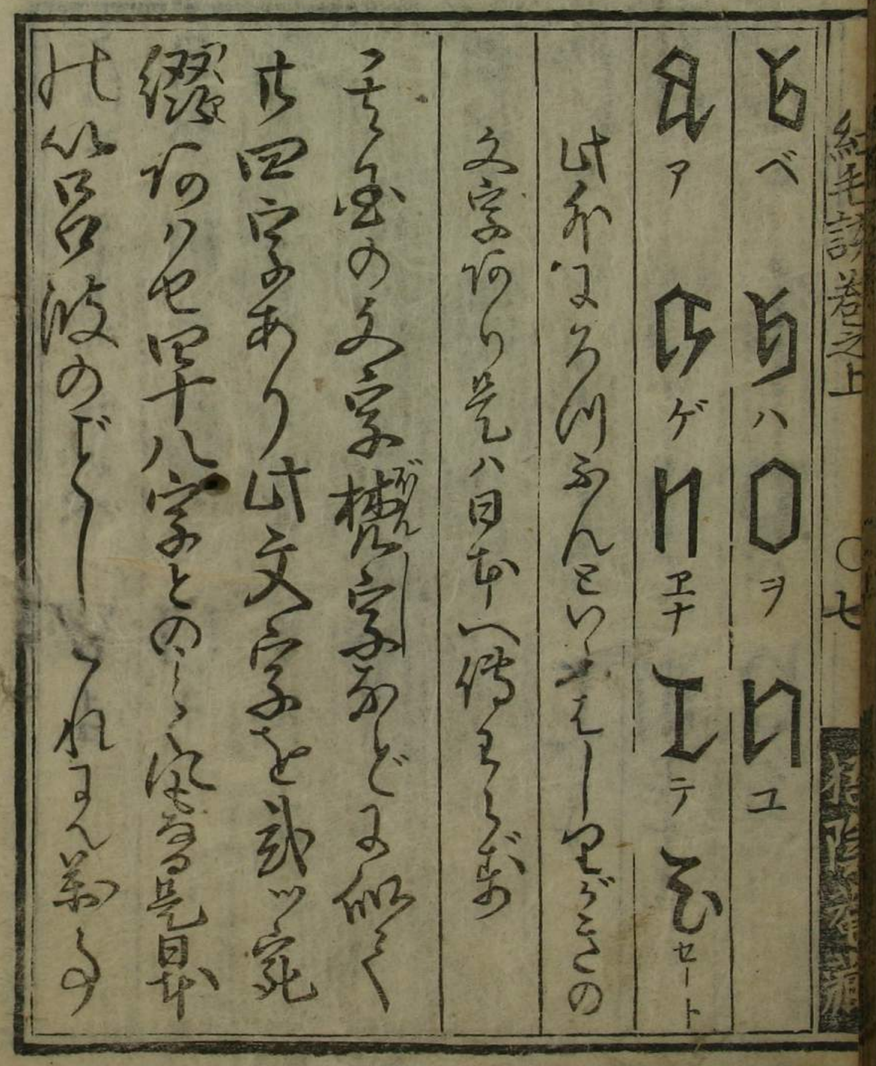
節十の中まつを形二魚をあらべ
ある白を絵巻うり花十二月日本の
ゐうう玄武での十二支はお中まつ
又一畫夜を十二時とをめぐ古四時
しをあらふ風あり

テレツキリヤツトル 筆書のおさまものあり俗はからくさ文字と云りのもあり

ナ エ六 ル エ七 ル エ八 リ エ九 ヤ エ十 ツ エ十一 ト エ十二 ル エ十三

J デ　K カ　L ドブルトイユ
C セ　I イ　P ペ　V イユ
B ベ　H ハ　O ヲ　U ユ
A ア　G ゲ　N ヲナ　T テ　Z セート
ドブルリヤウトル　印板用る字あり上字のめさもれあり
F ヲハ　M ヲマ　S ヲサ　Y ヲイ
E ヲ　L ヲラ　R ヲラ　X ヲキサ
D デ　K カ　A キウ　W ドブルトイユ
メルウリヤウトル　印字のめさものあり

C セ　I イ　P ペ　V イユ
B ベ　H ハ　O ヲ　U ユ
A ア　G ゲ　N ヲナ　T テ　Z セート
ドブルリヤウトル　印板用る字あり上字のめさもれあり
F ヲハ　M ヲマ　S ヲサ　Y ヲイ
E ヲ　L ヲラ　R ヲラ　X ヲキサ
D デ　K カ　A キウ　W ドブルトイユ
C セ　I イ　P ペ　V イユ



はかるのよろしかんといへり　ひとつのこの
文字なり　ひとつ八日本へ伝ふるとぶの
こゝろ字のみ字横字あるどよ仮名
は四字あり　はは文字なと欠ッ字
仮名なりも字八字とのゝ字なる見日本
はは昔波のごゝ　これよん新ふ

相すむよりも書多分
はゝ公用あるゝ日本ゝ　ちがひた
より書もしどめ右へくと横よ
書多り　無ゝて文字倦び
一さいの書を相ゐいたゝり巻て
左ゝ紙まるゝ　こゝろ人相家
より八ゝ　こるゝ色ゝ服中
よ巻ゝ　ふ紙を赤色あり

云須ハいぎりんぺるまとがるかなどの
須に似て口記ると名とりいふ
なし果なあり世界中より
ハたやく成長して十二三歳より
語をおぼえしるよし其命も
五十歳あまり保ちなし須ばるとぞも
中国とバ「ぽるらん」て云国七州
其　せいらんと　ぐるうねげ

ういたらさと　うるとうんと　かろう
ぷるいせる　ふらいすらんと　げるらんと
右七州の内紅毛ハ諸国へ船出す
ところの名なれバ世上まで知らん
だと呼　華人ハ和蘭国又紅毛国
といふ日本にてハ阿蘭陀国といふ
此七州に國王巳人ありそれを
こんぱんやと名づく務らよ

形を仕出し世界を經歷して
交易商賣を業とする世界古今
目前の實民は自てもちがひ高
ぐを求一ぢらいは物を主とする
ものとなる武士は殺部
と殺るゆへ殺生をたつとぶの為
民殺生をたつとぶ為ごとに
天竺佛國は隣国へ殺人

なの國まれこんぶんやれ書記と
ぜらふふ芸を商あの中
よおやぎそらふ浦あり此
に出ぜりとそれ金をとて
法を高へ高は法ハしやがたり
まで交易の貨物を持来る
ようぜらるるとうり十五年よ
きを変づ恵訓宝をいてとる

さて咬嚼吧とゝ月中ゝ節ゝ行ゝよ
出ゝ船ゝして古月の初ゝ日ゝ海ゝ入
津す八月九月百姓の畑商賣ゝ
て九月ゝ日ゝ定ゝ海ゝ帆すぜゝらる
れゝ下ゝ代ゝとかびゝんゝといゝ山かびゝん
ゝゝゝれゝゝゝびゝゝんゝゝ代ゝ事ゝ使ゝ
役ゝをゝつゝゝめゝ東ゝ船ゝ事ゝすゝゝ事ゝ船
つゝまゝりゝ時ゝ不ゝ佞ゝ事ゝ友ゝ

一船ゝ船ゝ六艘
ゝ十年ゝ程ゝ積
テ四天下ゝ周流ゝ
損船三艘焼
ゝテ殘ゝ三艘ゝ
遂ゝ悔ゝ山海
輿地ノ図ノ作ル
北人ノ名マゴー
ラアンスト云明人
ノ図説ゝフラン
スゝ人メガラ

旅館ゝ
ゝ書ゝ
○ワあゝまんすゝいゝるかびゝんゝ元
禄年中ゝ
くゝゝゝと同ゝ
抽ゝ
年ゝ
ゝゝて

ゝてゝ船ゝ行ゝとゝ出ゝ
ゝふゝ
ゝ時ゝ荒井氏ゝ
ゝ中ゝ彼ゝかびゝゝん
ゝ国ゝて五十
ゝゝゝゝ世界
ゝゝゝゝゝゝ

二カ「モモノトス」
傳譯ノ誤ラン
熙後百七十
年ノ經テノ大船
ノ作リ出シ今
東南ノ地三
百餘ヲ往来
スル由

いさゝ船十二艘仕立て穀米塩新
代酒等でのゝ積入毎年艘ゞ東
西南北へ出しる先山地と云るの
二三千里だゝり東へこぎ行しふ
何のふく船相もしあり陸の八月
もゝとさして船さゝへて
八月す幾度こげども西へくゝと船
ゝり一向行ことなくまゝ

おもへ海りしゝゝ乾ハ東方發
出代氣志つゝ西へめ出あるん
ゝゝき又南方とさして行るもの
いつるも乾もこゝ三千里南へゝゝ行
しふゝ丈十丈半或ハ二十丈
だゝり代濱南へ岸ゝ一向船と
下の海へ岸南へ岸ゝ一向船と
ふく海りしゝゝ術ゝ乾船
ゝゝ海りしゝゝ山ゝよりし

千里濱と出し南の方とんりう
小九六百里もあらんとぞ思ふまま
滑りて南より北へ向く落
るると思へしと岩ハ世界の正樓よ
てもこりうんと評判しなるとう
さし西へ引しものいつるハ西をさ
して二三ヶ里も艤引しよう乳
の如くなりしうれしなる程ほど

ハ百ん〳〵〳〵程ハ二十三軍行の
やう〳〵んとなりさうるやうに小見しが
蜘の巣を一面にはりつめたるごとく
ほのかハ二十三蜘の巣もこまつく
おしやづ〳〵再引の及ばさ
こうぎしづ海ハ百ハ海も波りの
一面よりあつて一向舟ことごとざる
ゆへ見物おく本国へ帰りしと

あり。仁のうるはしけと初る人あり。
ましまく小へ汚る毎のものゝ中せ
しハ是も三四月墨こぎもしよ見
るハ紙ほどの清あるうるはしまし
ひゝさかバ生産の使ともるべ
きしく人くあ十人ほどつげ初き
侍茶ゐど勢くつてゐい事年又
糸べきし紙ハ海うるハ山ま

紙の小ちまし山ゐれバ屋
ま年よる生ま山ま。玉ハ山ま
ゐゝど宣ま年のとき茶末
絮をおゝ茶ま年のゝさゐ枯
るゝどさし玉まおほ玉ゐ
紙海へ一のゝ凡ゝよまま毎ま
ゝる人数ゐ海相もて察すま
世ま紙のゐるゐまゆ夜ま

年の内ふこゝ〳〵漆瓶こゝてい
と相人くこちのちハ行の利用もある
まゞきとし法来せゞるとゆゝ
うよ阿蘭陀國風ゑ方と不解
して紙来するものゝれバ日和来
る高船もいろ〳〵の貨物紙ゑよ
つ〳〵〳〵〳〵本国の産とハゞゝ
あゝゝゞ世界繁盛の況ゞよ文明

しまるよのこゝ玉多ーたゝふゝる毛
⊙物ゝ毛物ゝの新ひ多ー
⊙らちや ⊙らせてと ⊙へるへとあん
⊙だまて ⊙さを ⊙さるぜ
⊙かるさい ⊙あるんさい ⊙ちめん
⊙毛氈 ⊙猩〻郷 ⊙世せゞひの
漆茶のゝと和人 南海ゑ住む猩〻
の血とゝて漆るゝいゝハせゝ

はしとゝ[illegible]ぞゝでをひふるすト
いつるかびあんよ問ゝまたゝふのゝび
をゝしゝも紅葉の新しき色
猶ゝ郷と深るふゝしんゝゝ今日
かゝしんとバ椎の木といつるすのふ
木目も知ふ形も似ゝる木あり之を木
を木ゝるゝとバ鬱同ゝ一宮よ百中
ゝさ思ふゝ思ふ思ひ毎ゝしく生ずを

形酒酢あふゝ思ふ似ゝる蓋を
おゝくゝ知ゝの蓋籠ゝのごく
写生ゝゝゝ毎ゝ笠をかゝを之を
この底を三重ハ絵縮のごゝさもの
いしゝゝさて波思ゝゝゝ毎ゝ
一の笠ゝつゝゝふゝゝとして知ゝゝゝ
内ゝも思のつゝゝハ底の絵をゝゝや
ぶゝゝゝハ寸二乃笠ゝ知ゝる

ぶ二のもとをつまさぶんハ底
酒を盛やぶり寸三のもとへ落る
寸三のもとをもまとかくのこ共は
れ箱へ落る寸出もとをおちる
ぶんむとりとれなのりめ蓋を入
殿部はかきぜ蓋をして口を
ちやんまもめり地へうげめはを三年
ほど経て本墓中ひらきたんへ

ぶしまもとをしたまゆぐひ茶
毛茶をを漬るにたちといへ先生
桜ちよ和俗の樽ぐれ血まし漬ると
ひのも殺らくハ拙の味のやまち
ふてもあらんう和俗酒ふとく宝を
ちやちぐといくばかり
○このちやんちます らそいん茶かり

又一名あもたべ（そらんとゝ）といふものあり
らていん語ハ紀もの古俗かり今の
通すてハすていんふらすゝ行るど
ふらんとゝいふ芝ハ漢名犬蹠布とて
織地あり山もものようでこのうづくさハ
犬のかゝるよりいてやけバ布ハサ
も換ぢ堀ハしくをやけ蒙て
しのごゝ行ゝしくるふら

もろこしにハ古ハ西域ゝり奉れ後
ハ東方朔ハ神異經の中にも
西域犬州といふ所ありて犬蹠布と織るゝ又張華
博物志郭璞が山海經の序にも
載しゝ事ハ西域ゝ代ゝ有と
ゝ行ゝ事ゝ行ゝ知ハ犬
蹠のかいこゝ知て動てあさりの

張とせり山の紅毛人も織法をと
きゝて又大羅の毛をもて織といふハ
唐人の僞り僞るなり世間にいとゝこ
ちんとゝいふ毛もあり しらゝも毛も
被服礼世法ゞ ごさこち僞とうしのふて
今ハ絶るよし ちんざんも相絶るよう
ちゝゝ小今日本薩州の産平賀源内
といふるく東都にて自工夫といて

此ものゝ織法す紅毛人も毛とゝんて
大ふ驚るゝとゝいふ所なり
と説を絶又
ちゝをかりて云 尼古人も去ゝ
帝代の孫者なるゆへ云ふ
伝る

紅毛波巻の上波